

社会的ネットワークの構成と態度の両価性の関連

—態度の両価性の構造的側面に着目した検討—

平島 太郎¹⁾ 五十嵐 祐²⁾

問題と目的

人々は、政治的なトピックや、ある製品などに対して、他者と完全に独立して態度 (attitudes) を形成したり、意思決定を行っていたりするわけではなく、周囲の他者からの影響を受けて態度を形成している。一方で、世論の形成や、製品の流行といった集合現象は、個々人の相互作用によって生じたマクロな帰結として把握することが可能である (e.g., Granovetter, 1978; Kadushin, 2012)。より一般的にいえば、人々は社会的環境からの影響を受けると同時に、社会的環境を形成するという循環的なプロセスの中で社会的生活を送っている (亀田・村田, 2010)。本研究では、こうした観点から、社会的ネットワークと個人の態度との関係に着目する。そして、個人がどのような態度をもつ他者とつながっているかという社会的ネットワークの構成 (social network composition) と、その個人の態度の両価性 (attitudinal ambivalence) の関連について、基礎的な検討を加えることを目的とした。以下ではまず、態度の両価性の概念と先行研究の流れを説明した後、社会的文脈における態度の両価性の役割について述べ、本研究での具体的な検討点をまとめる。

態度と態度の両価性

社会心理学の領域では、人々の社会的行動や意思決定において、態度が重要な役割を担うことが指摘されてきた (Allport, 1935)。態度は、「ある対象に対する好ましい-好ましくない (favorable-unfavorable) の評価によって表される心理的傾向」と定義される (e.g., Bohner & Dickel, 2011; Eagly & Chaiken, 2007)。一般的に、態度は、ポジティブ語とネガティブ語が対になった項目群を用いて測定される (e.g., Ajzen, 1991)。この場合、ある個人がある対象に対していただく態度は、ポジティブ-ネガティブを両極とした一軸上に布置するものとして扱わ

れる。

しかし、たとえば、野菜を摂取することに対して「健康に良いがおいしくない」という評価をいただくように、人々は、同じ対象についてポジティブな評価とネガティブな評価を共に含む、両価的な態度を持つ (e.g., Cacioppo, Gardner, & Berntson, 1997; de Liver, van der Pligt, & Wigboldus, 2007; Kaplan, 1972)。このような、ある対象に対する態度に、ポジティブ評価とネガティブ評価が含まれる程度を、態度の両価性という (e.g., Thompson, Zanna, & Griffin, 1995)。また、両価的な態度構造や他者との態度の不一致によって生じる葛藤や不快感、緊張、活性といった主観的な側面に焦点を当てた研究もある (e.g., Newby-Clark, McGregor, & Zanna, 2002; Priester & Petty, 1996)。本研究では、構造的な側面に着目したものを態度の構造的両価性 (structural ambivalence)、主観的な側面に着目したものを態度の主観的両価性 (felt ambivalence) と呼ぶ。構造的両価性は、態度対象に対する注意を喚起し (Cornil, Ordayayava, Kaiser, Weber, & Chandon, 2014)、態度対象に関する精緻な処理を駆動する (e.g., Jonas, Diehl, & Brömer, 1997; Maio, Bell, & Esses, 1996) のに対し、主観的両価性は、その不快感を低減するための、一面的で自己確証的な情報処理を駆動する (e.g., Clark, Wegener, & Fabrigar, 2008; Nordgren, van Harreveld, & van der Pligt, 2006) と考えられている¹⁾。

態度の両価性に関する先行研究の流れと本研究の立場

態度の両価性に関する先行研究は、主に以下の3つの観点からまとめることができる。第一に、態度の両価

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 五十嵐祐准教授)

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

1 本研究では、態度の両価性と社会的ネットワークの関連において、構造的両価性と主観的両価性のはたらかきが概念的に異なることを想定しており、その想定に沿ったレビューを行っている。一方、従来の研究では、必ずしも構造的両価性と主観的両価性を概念的・操作的に区別しておらず (e.g., Hänze, 2001)、これらの両価性の機能の差異については、いまだ統一的な結論が得られていない。

性の個人差をどのように捉えるかといった測定法 (e.g., Kaplan, 1972; Refling, Calnan, Fabrigar, MacDonald, Johnson, & Smith, 2013) に関する検討である。第二は、態度の両価性が態度と行動意図・行動との一貫性に及ぼす影響 (e.g., Armitage & Conner, 2000; Conner, Povey, James, & Shepherd, 2003; Cooke & Sheeran, 2004; 平島・土屋・元吉・吉田, 2014) に関する検討である。第三は、態度の両価性が個人の情報処理や意思決定に及ぼす影響 (e.g., van Harreveld, van der Plight, & de Liver, 2009) に関する検討である。

以上の3つの観点からなされた研究は、いずれも個人の認知処理や意思決定を関心事としている。すなわち、態度の両価性に関する従来の多くの研究は、実験者が提示した説得文の処理や、個人内の情報処理過程を扱うにとどまっておき、個人間のつながりである社会的ネットワークの影響といった、社会的な文脈を積極的に考慮した研究はわずかである。次節で述べるように、態度の両価性は社会的な機能をもつ可能性がある。本研究では、個人を情報処理の主体としてだけでなく、社会的ネットワークに埋め込まれた存在として扱い、社会的ネットワークと個人の態度の両価性の関連を検討する。

社会的文脈における態度の構造的両価性

本研究では、個人が社会的環境からの影響を受けると同時に、社会的環境を形成するという循環的なプロセスの観点から、態度の両価性について検討を加える。個人と社会の循環的な影響プロセスの中で、態度の構造的両価性が、集団や社会の多様性の維持や、その多様性が有効にはたらくようにする機能をもつ可能性が指摘できる。たとえば、Cavazza & Butera (2008) では、構造的に両価的な態度をもつ者は、その場の規範的文脈に合わせ、他者の態度に応じて柔軟に態度表出を行うことが示されている。この結果は、個人がポジティブな評価とネガティブな評価を含む構造的に両価的な態度をもつことで、ポジティブな態度をもつ他者とも、ネガティブな態度をもつ他者とも関係を維持し、社会的ネットワークの多様性が維持されることを示唆する。

また、逆方向のプロセスとして、社会的ネットワークが個人の両価性に影響を及ぼすこともある。あるトピックに対してポジティブな態度をもつ他者と、ネガティブな態度をもつ他者が含まれる、多様性の高い社会的ネットワークに個人がいた場合、周囲の他者からの社会的影響を受け、個人の態度が両価的になることが報告されている (Priester & Petty, 2001; Visser & Mirabile, 2004)。こうした2つのプロセスを考慮すると、社会的ネットワークと個人の両価性が、循環的に作用していることがわかる。

社会的ネットワークの多様性は、個人にとって利益をもたらすだけでなく、ネットワーク全体の利益を高める (e.g., 橋渡し型社会関係資本; Putnam, 2000)。したがって、個人内のプロセスのみならず、社会的ネットワークを前提として、態度の両価性のはたらきを検討することは重要である。

本研究の検討点

以上の関心から、本研究では、社会的ネットワークの多様性の維持に重要な役割を担うと想定される態度の構造的両価性に着目する。なぜなら、主観的な葛藤である主観的両価性よりも、態度構造が両価的であることが、本研究の視座にとって、より重要となるからである (cf. Cavazza & Butera, 2008)。また、社会的ネットワークの特徴として、個人を取り巻く社会的ネットワークにおいて自己と同じ態度をもつ他者の割合 (社会的ネットワークの同質性) と、異なる態度をもつ他者の割合 (社会的ネットワークの異質性) を扱う。両者を併せて社会的ネットワークの構成 (social network composition) と呼ぶ。そして、社会的ネットワークの構成と態度の両価性の関連を検討する。

先行研究では、社会的ネットワークの異質性が態度の主観的両価性を高めることが報告されている (Visser & Mirabile, 2004)。しかし、態度の構造的両価性が社会的ネットワークの構成と関連するかについては、未だ検討されていない。態度の主観的両価性は、必ずしも態度構造が両価的であることによって生じるのではなく、単に自己と他者との態度の不一致によっても喚起される (Priester & Petty, 2001)。そのため、両者は弁別して扱う必要がある (cf. van Harreveld, Schneider, Nohlen, & van der Pligt, 2012)。

本研究では、社会的ネットワークの構成と、態度の構造的両価性に関し、以下の3つの仮説を検討する。まず、個人が埋め込まれた社会的ネットワークの異質性が高いほど、当該個人の態度の両価性が高いと予測した (仮説1)。先行研究では、参加者に対して、ポジティブな情報とネガティブな情報を提示することで、態度対象の構造的両価性を操作している (e.g., Jonas et al., 1997; Priester & Petty, 1996)。これを社会的ネットワークに置き換えると、自らの態度と異なる他者の態度が情報源となり、個人の態度構造が両価的になると考えられる。また、逆の仮説として、社会的ネットワークの同質性が高いほど、個人の態度の両価性が低いと予測した (仮説2)。

さらに、本研究では、社会的ネットワークの構成と態度の構造的両価性の関連を調整する要因についても検討を加える。社会的ネットワークの構成が異質であっても、他者の態度を正確に読み取れなければ、社会的ネッ

トワークの構成と態度の両価性との間に対応はみられないと考えられる。そこで本研究では、他者の意図や感情を読み取る能力であるEQ (the Empathizing Quotient; Baron-Cohen, 2002; Baron-Cohen & Wheelwright, 2004) の高さが、社会的ネットワークと態度の両価性の関連を調整する可能性を検討する。具体的には、EQが高い場合、他者の態度を読み取ることができるため、社会的ネットワークの構成と態度の両価性の関連が強くなると予測される(仮説3)。また、先行研究との対応を検討するため、態度の主観的両価性も扱う。

方法

調査対象者

愛知県内の女子大学生131名(平均19.6歳, $SD = 1.04$)が本研究に参加した。なお、社会的ネットワークに関する指標に欠損があった15名と、EQの指標に欠損があった2名を除く、114名を分析対象とした。

態度対象となるトピック

本研究では、態度対象として、「1. 容姿で異性・パートナーを選ぶこと」、「2. 自分の夢よりも家庭の事情を優先すること」、「3. 『X大学の学生』に対するイメージ²」、「4. 『女は結婚よりも仕事』という考え方」という、幅広い領域にわたる、4つのトピックを用いた。これらの4つのトピックは、大学生50名を対象とした予備調査を経て選定された。予備調査に用いられたトピックと、予備調査の結果をAppendixに示す。本調査で用いたトピックの選定にあたっては、(1) 両価的な態度をもちうるトピックであること、(2) 他者との会話経験があるトピックであること、の2点を考慮した。2番目の基準は、他者の態度によって自らの態度および態度の両価性が影響を受けるという社会的影響のプロセスを想定したため、トピックの選定基準として設けたものであった。

手続き

本調査は、「大学生の日常生活に関する意識調査」という名目で行われた。性別と年齢について回答してもらったあと、ネームジェネレータにより、各参加者の社会的ネットワークを測定した。続いて、各トピックに関する態度変数を測定し、個人特性であるEQを測定した。最後に、各トピックに関する各参加者のネットワーク上の他者の態度を測定した。最後に、本調査の目的を説明し、調査を終了した。

測定

ネームジェネレータ 参加者の社会的ネットワークを

測定するために、Igarashi, Kashima, Kashima, Farsides, Kim, Strack, Werth, & Yuki (2008) のネームジェネレータを参考にした手続きを用いた。まず、参加者の社会的ネットワークに含まれる成員を想起してもらうため、「これまで会って会話を交わしたことがあり、必要であれば連絡が取れる相手」をできる限りリストアップしてもらった。なお、プライバシーの保護のため、実名を挙げるのではなく、参加者自身が判別できればよいという条件のもと、イニシャルやニックネームで回答してもらった。次に、「価値観が似ている人」と「価値観が似ていない人」を、それぞれ最大4名、合計で最大8名まで指名してもらった(以下、この手続きによって指名した他者をオルター(alter)と呼ぶ)。そして、各オルターについて、「大学の友人」や「家族」など、参加者との関係性を自由記述で回答してもらった。

各トピックに関する態度の両価性 続いて、4つのトピックごとに、トピックに対する態度の構造的両価性と態度の主観的両価性を測定した。

各トピックに対する態度の構造的両価性 態度の構造的両価性の測定方法として一般的に用いられている手続き(Kaplan, 1972; Reffing et al., 2013)にのっとり、各トピックに対するポジティブ評価とネガティブ評価を別々に測定し、両得点を合成することで構造的両価性得点を算出した(算出方法は結果を参照のこと)。ポジティブ評価の測定には、「肯定的でない～とても肯定的」、「ポジティブでない～とてもポジティブ」、「良くない～とても良い」の3項目を用いた。ネガティブ評価の測定には、「否定的でない～とても否定的」、「ネガティブでない～とてもネガティブ」、「悪くない～とても悪い」の3項目を用いた。それぞれの項目について、0～3点の4件法で回答を求めた。

各トピックに対する態度の主観的両価性 先行研究(Bassili, 1996; Hänze, 2001; Priester & Petty, 1996)を参考に、「Xに対して、複雑な気持ちを抱いている」、「Xに対する私の考えは、葛藤している」の2項目を用いた(Xは各トピック)。「1:まったく当てはまらない」～「5:とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

EQ Baron-Cohen & Wheelwright (2004) が開発した60項目版のEQ尺度を8項目に短縮したバージョン(Loewen, Lyle, & Nachshen, 2007)を用いた。この尺度は、「他人の立場に立つことが容易にできる」、「自分ではわからないが、よく人から無神経だと言われることがある(逆転項目)」などの8項目から構成される。各項目について「1:まったくあてはまらない」～「4:とてもあてはまる」までの4件法で回答してもらった。先行研究(Baron-Cohen & Wheelwright, 2004, Loewen et al.,

2 「X大学」は、調査協力者の所属する大学とは異なる大学であり、調査協力者にとっては外集団にあたる。

2007) にならい、逆転項目の得点を処理したうえで、1点と2点を0, 3点を1, 4点を3と再コードし、集計した。

各トピックに関する自己とオルターの態度の類似度
トピックごとに、各オルターと自己の態度の類似性について回答してもらった（「1：似ていない」～「5：似ている」）。

結果

分析には、R 3.0.2およびHAD12.21（清水・村山・大坊, 2007）を用いた。

分析に用いる変数の算出

各トピックに対する態度の主観的両価性, EQ 各トピックに対する態度の主観的両価性 ($\alpha_s > .79$) およびEQ ($M = 0.88, SD = 0.42, \alpha = .71$) の尺度について、項目得点を平均し、尺度得点とした。尺度得点の記述統計をTable 1に示した。

各トピックに対する態度の構造的両価性 まず、トピックごとにポジティブ評価を測定する3項目 ($\alpha_s > .86$) と、ネガティブ評価を測定する3項目 ($\alpha_s > .84$) の得点を平均化し、各トピックに対するポジティブ得点とネガティブ得点を算出した。次に、Priester & Petty (1996) に基づき、各個人において、各トピックに対するポジティブ評価得点・ネガティブ評価得点のうち、得点の大きい方をLarge得点（以下、L得点とする）、小さい方をSmall得点（以下、S得点とする）として、L得点とS得点に対し、 $5S^{0.5} - L^{1.5}$ の式を適用することで、参加者ごとに、各トピックに対する態度の構造的両価性得点を算出した。なお、ポジティブ評価・ネガティブ評価得点のいずれかが0点である場合、上記の式によって正しく得点が算出されないため、ポジティブ得点・ネガティブ得点に1点を加えた値を用いて、態度の構造的両価性得点を算出した (Priester & Petty, 1996)。この指標は、ポジティブ評価得点とネガティブ評価得点が同程度である（＝類似性が高い）ほど、あるいは、2つの評価得点がいずれも高い（＝強度が高い）ほど、大きい値を示すという性質を持つ³。

態度の構造的両価性得点の平均をTable 1に示した。

ネットワークの構成 自己とオルターの態度の類似度（「1：似ていない」～「5：似ている」）について、1点・2点のオルターを「異質な他者」、4点・5点のオルターを「同質な他者」とした。同質な他者・異質な他者の人数を、オルターの数（最大で8名、 $M = 7.2$ 名、 $SD = 1.1$ ）で除したものを、それぞれ「ネットワークの同質性」、「ネットワークの異質性」とした。自己とオルターとの態度の類似度は、4つのトピックごとに回答してもらったため、ネットワークの同質性・異質性の指標はトピックごとに算出された。記述統計をTable 1に示した。

統制変数 最後に、統制変数として、以下の2つの変数を算出した。まず、ネームジェネレータにおいて「これまで会って会話を交わしたことがあり、必要であれば連絡が取れる相手」として挙げられた人数を、ネットワークサイズ ($Median = 35$) とした。2つ目に、オルターとの関係性に関する自由記述の回答をもとに、オルターの属性の数を参加者ごとに算出した ($M = 3.85, SD = 1.35$)。たとえば、8名のオルターのうち、5名が「大学の友人」、2名が「高校の友人」、1名が「家族」だった場合、オルターの属性数は3となる。

社会的ネットワークの構成と態度の両価性の関連

社会的ネットワークの同質性・異質性と、態度の構造的両価性・主観的両価性の関連を検討するために、ネットワークサイズとオルターの属性数を統制変数とした偏相関分析を行った (Table 2)。統制変数を投入したのは以下の理由による。まず、ネットワークサイズが大きいほど、多様な価値観をもつ他者と相互作用を行っている可能性がある。しかし、本研究では個別のトピックに関する態度の両価性と、ネットワークの同質性・異質性の関連を検討することが目的であったため、統制変数とした。また、本研究は、オルターの態度の同質性・異質性との関連を検討することが目的であったため、デモグラフィック変数のネットワークの多様性となりうる、オルターの属性数を統制変数とした。分析の結果、トピック

Table 1 トピックごとの記述統計

	トピック1 「容姿で異性・パートナー」		トピック2 「自分の夢より家庭の事情」		トピック3 「X大学の学生」		トピック4 「女は結婚よりも仕事」	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
態度の構造的両価性	3.79	1.46	3.89	1.36	2.78	1.36	3.34	1.74
態度の主観的両価性	2.85	1.15	3.19	1.15	1.61	0.87	2.79	1.20
ネットワークの同質性	.36	0.22	.36	0.25	.35	0.31	.35	0.25
ネットワークの異質性	.34	0.22	.28	0.24	.20	0.22	.27	0.23

3 この指標の詳細な性質については、Priester & Petty (1996) を参照のこと。理論的に取りうる値の範囲は、0.00 (L = 5, S = 1) ～9.80 (L = 5, S = 5) である。

3「[X大学の学生]に対するイメージ」においてのみ、ネットワークの同質性と、構造的両価性および主観的両価性との間に負の相関がみられた。しかし、いずれのトピックについても、ネットワークの異質性と態度の両価性との間に相関はみられなかった。

次に、EQによる調整効果を検討した。まず、EQ得点の中央値で参加者をEQ高群 ($n = 58$) とEQ低群 ($n = 56$) に分割し、同様の偏相関分析を行った (Table 2)。その結果、EQ高群では、トピック3「[X大学の学生]に対するイメージ」において、ネットワークの同質性と構造的両価性との間に負の相関がみられた。EQ低群では、トピック3において、ネットワークの同質性と態度の構造的両価性との間に負の相関がみられた。また、トピック1「容姿で異性・パートナーを選ぶこと」およびトピック3「[X大学の学生]に対するイメージ」において、ネットワークの異質性と主観的両価性との間に正の関連がみられた。EQの調整効果を検討するため、ネットワークの構成と態度の両価性との間に関連がみられた相関係数について、群間の差を検討した。その結果、トピック3におけるネットワークの異質性と態度の主観的両価性との相関においてのみ、EQ高群と低群との間に有意な差が確認された ($p = .002$)。

考察

本研究の目的は、社会的ネットワークの構成 (同質性・

異質性) と態度の両価性の関連を検討することであった。サンプル全体を分析した結果、4つのトピックのうち、トピック3「[X大学の学生]に対するイメージ」において、社会的ネットワークの同質性と、態度の構造的両価性および主観的両価性との間に負の相関がみられた。すなわち、参加者の社会的ネットワークにおいて、このトピックに対して自己と同じ態度をもつオルターの割合が高いほど、態度構造がより単一的になり、主観的な葛藤が低いという傾向がみられた。この結果は、仮説2を支持し、先行研究 (Visser & Mirabile, 2004) ととも一致していた。しかし、仮説1の予測とは異なり、社会的ネットワークの異質性は、いずれの態度の両価性とも正の関連を示さなかった。

これらの結果は、他者をもつ態度を情報としてとらえた場合、選択的な情報選好の観点から解釈できる。個人は、基本的に、自らの態度に不一致な情報よりも、一致した情報を選好する傾向にある (e.g., Fischer & Greitmeyer, 2010; Frey, 1986, Smith, Fabrigar, & Norris, 2008)。つまり、周囲に自らと異なる態度をもつ他者がいたとしても、個人はその重要度を低く見積もり、自らの態度とは不一致な他者の態度を内在化しないため、態度の両価性は高くならない。逆に、自らの態度と一致した他者の態度に対しては、個人はその重要度を高く見積もり、他者の態度を内在化させ、態度構造がより単一的になると考えられる。さらに、周囲の他者と自己の態度

Table 2 態度の両価性と社会的ネットワークの構成との関連 ([] 内は95% 信頼区間)

	全体 ($n = 114$)		EQ高群 ($n = 58$)		EQ低群 ($n = 56$)	
	構造的両価性	主観的両価性	構造的両価性	主観的両価性	構造的両価性	主観的両価性
(1) 「容姿で異性・パートナー」						
ネットワークの同質性	-0.096 [-.277, .091]	-.115 [-.295, .072]	-.073 [-.329, .194]	-.004 [-.267, .259]	-.151 [-.403, .122]	-.225 [-.465, .045]
ネットワークの異質性	-.094 [-.274, .093]	.148 [-.038, .325]	-.190 [-.431, .077]	.035 [-.230, .295]	-.016 [-.283, .253]	.249 † [-.020, .484]
(2) 「自分の夢より家庭の事情」						
ネットワークの同質性	-.093 [-.274, .094]	-.027 [-.212, .159]	-.047 [-.306, .219]	.075 [-.192, .332]	-.041 [-.306, .229]	-.098 [-.356, .175]
ネットワークの異質性	-.081 [-.263, .106]	.131 [-.056, .309]	-.078 [-.334, .189]	.142 [-.126, .390]	-.109 [-.366, .164]	.093 [-.180, .352]
(3) 「X大学の学生」						
ネットワークの同質性	-.351 ** [-.506, -.173]	-.178 † [-.355, .012]	-.279 * [-.506, -.014]	-.186 [-.430, .083]	-.405 ** [-.613, -.146]	-.136 [-.397, .145]
ネットワークの異質性	.122 [-.069, .304]	.095 [-.096, .279]	.016 [-.251, .280]	-.203 [-.444, .066]	.167 [-.113, .423]	.377 ** [.113, .591]
(4) 「女は結婚よりも仕事」						
ネットワークの同質性	-.029 [-.214, .158]	.099 [-.089, .281]	.006 [-.260, .271]	.086 [-.183, .344]	-.032 [-.297, .238]	.137 [-.135, .391]
ネットワークの異質性	.009 [-.178, .195]	-.027 [-.212, .160]	-.009 [-.274, .257]	-.002 [-.267, .264]	.005 [-.263, .273]	-.097 [-.356, .175]

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$.

が同じであることが社会的証明となり、自己の態度を妥当化するように機能したため、ネットワークの同質性と態度の両価性に負の関連がみられたと考えられる。

EQによる調整効果を検討した結果、トピック3『X大学の学生』に対するイメージにおける社会的ネットワークの異質性と主観的両価性の関連について、EQ高群と低群の間に相関の差がみられ、EQが低い参加者では、社会的ネットワークに含まれる、自己と態度が異なるオルターの割合が高いほど、主観的両価性が高かった。この結果は、EQが高い方が社会的ネットワークの構成と態度の両価性の関連が強いとする仮説3とは逆であった。EQには、単に相手の意図や感情を読み取るだけでなく、それに対して適切に対処する能力も含まれる (Baron-Cohen, 2002; Loewen et al., 2007)。すなわち、EQが低い者は、EQが高い者と比べ、自己の態度と異なる態度をもつ他者に直面した際の影響が大きいいため、EQの低群において、ネットワークの異質性と主観的両価性に正の関連が見られたと考えられる。

先行研究 (Visser & Mirabile, 2004) では、ネットワークの構成と主観的両価性との関連が示されたが、本研究では、主観的な葛藤の知覚だけでなく、態度構造にもネットワークの構成が関連することが示唆された。ただし、ネットワークの異質性に関しては、EQ低群における態度の主観的両価性と正の関連を示すにとどまり、態度の構造的両価性との関連は示されなかった。このことは、異質な他者の態度を知覚することと、その態度を内在化するプロセスを弁別する必要があることを示唆する。今後の研究では、これらのプロセスを区別したうえで、個人の両価的な態度構造と社会的ネットワークの構成の対応を検討する必要がある。

本研究の課題と展望

本研究の課題として、以下の3点が挙げられる。第一に、社会的ネットワークと態度の両価性との関連は、相関の大きさをみると、それほど強いとはいえない。また、95%信頼区間の幅が広いいため、実際にどの程度の関連の強さがあるかについても、慎重に解釈しなければならない。この点については、サンプルサイズを大きくし、推定の精度を高くする必要がある。また、本研究では、既存の社会的ネットワークの構成を測定するために、調査的な手法を用いた。そのため、新奇な態度対象ではなく、もともと参加者が有している態度を扱わざるをえなかった。その結果、態度対象に関する知識や先行経験が交絡し、相関が希薄化された可能性がある。

また、本研究では、社会的ネットワークの構成をトピックごとに指標化しているものの、そもそもの社会的ネットワークを「価値観が似ている人・似ていない人」とい

う教示で測定している。そのため、個別のトピックに対する態度と社会的ネットワークの構成との関連が、方法的な問題によって希薄化された可能性がある。今後は、たとえば、政治的なトピックについての態度と、政治的コミュニケーションを行う人とのネットワークなど、態度対象と社会的ネットワークの関連を特定の文脈の中で検討する必要があるだろう。

第二に、本研究では、社会的ネットワークの構成と態度の両価性との関連が生じるプロセスを直接的に検討していない。ここには、一般に2つのプロセスが含まれる。ひとつは、すでにあるネットワークの他者から影響を受け、自らの態度が形成されるという、社会的影響のプロセスである。もうひとつは、自己の態度に基づき関係を結ぶ他者を選択したり関係を維持したりする、社会的選択のプロセスである (e.g., 同類原理; 石黒, 2011)。この点については、社会的ネットワークと個人の態度を縦断的に測定し、社会的影響と社会的選択を弁別できる統計モデル (行為者志向型ネットワーク選択モデル; Snijders, Steglich, & Schweinberger, 2007) を適用して検討を行う必要がある。

第三に、本研究で得られた社会的ネットワークの構成と態度の両価性の関連は、上記の2つのプロセスではなく、自らの態度を参照し、オルターの態度を推測した結果として生じたものである可能性が挙げられる。すなわち、態度の両価性が低い個人ほど、自らの社会的ネットワークが同質であると知覚した可能性がある。ただし、本研究では、すべてのトピックに関して社会的ネットワークの構成と態度の両価性に対応関係がみられたわけではない。そのため、この代替説明の適用範囲は限定的であると考えられる。この点に関しては、今後、実際にオルターの態度を測定した研究を行う必要がある。

本研究では、態度の主観的両価性だけでなく、態度の構造的両価性も、社会的ネットワークの構成と関連する可能性が示唆された。今後は、上記に掲げた問題点をふまえ、態度の両価性と社会の多様性に関する循環的なプロセスと、それによってもたらされる個人や集団の利益について検討をしていく必要があるだろう。

引用文献

- Allport, G. W. (1935). Attitudes. In C. Murchison (Ed.), *A handbook of social psychology*. Worcester, Mass.: Clark University Press. pp. 798-844.
- Ajzen, L. (1991). The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 50, 179-211.
- Armitage, C. J., & Conner, M. (2000). Attitudinal ambiv-

- alence: a test of three key hypotheses. *Personality and Social Psychological Bulletin*, 26, 1421-1432.
- Baron-Cohen, S. (2002). The extreme male brain theory of autism. *Trends in Cognitive Science*, 6, 248-254.
- Baron-Cohen, S., & Wheelwright (2004). The empathy quotient: An investigation of adults with Asperger syndrome or high functioning Autism, and normal sex differences. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 34, 163-175.
- Bassili (1996). Meta-judgmental versus operative indexes of psychological attributes: The case of measures of attitude strength. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 637-653.
- Bohner, G. & Dickel, N. (2011). Attitudes and attitude change. *Annual Review of Psychology*, 62, 391-417.
- Cacioppo, J. T. Gardner, W. L., & Berntson, G. G. (1997). Beyond Bipolar Conceptualizations and Measures: The Case of Attitudes and Evaluative Space. *Personality and Social Psychology Review*, 1, 3-25.
- Cavazza, N., & Butera, F. (2008). Bending without breaking: Examining the role of attitudinal ambivalence in resisting persuasive communication. *European Journal of Social Psychology*, 38, 1-15.
- Clark, J. K., Wegener, D. T., & Fabrigar, L. R. (2008). Attitudinal ambivalence and message-based persuasion: Motivated processing of Proattitudinal information avoidance of Counterattitudinal information. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 565-577.
- Conner, M., Povey, R., James, R., & Shepherd, R. (2003). Moderating role of attitudinal ambivalence within the theory of planned behaviour. *British Journal of Social Psychology*, 42, 75-94.
- Cooke, R. & Sheeran, P. (2004). Moderation of cognition-intention and cognition-behaviour relations: A meta-analysis of properties of variables from the theory of planned behaviour. *British Journal of Social Psychology*, 43, 159-183.
- Cornil, Y., Ordabayeva, N., Kaiser, U., Weber, B., & Chandon, P. (2014). The acuity of vice: Attitude ambivalence improves visual sensitivity to increasing portion sizes. *Journal of Consumer Psychology*, 24, 177-187.
- de Liver, Y., van der Pligt, J., & Wigboldus, D. (2007). Positive and negative associations underlying ambivalent attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 43, 319-326.
- Eagly, A. H., & Chaiken S. (2007). The advantages of an inclusive definition of attitude. *Social Cognition*, 25, 582-602.
- Fischer, P., & Greitmeyer, T. (2010). A new look at selective-exposure effects: An integrative model. *Current Directions in Psychological Science*, 19, 384-389.
- Frey, D. (1986). Recent research on selective exposure to information. *Advances in Experimental Social Psychology*, 19, 41-80.
- Granovetter, M. (1978). Threshold models of collective behavior. *American Journal of Sociology*, 83, 1420-1443.
- Hänze M. (2001). Ambivalence, conflict, and decision making: Attitudes and feelings in Germany towards NATO's military intervention in the Kosovo war. *European Journal of Social Psychology*, 31, 693-706.
- 平島太郎・土屋耕治・元吉忠寛・吉田俊和 (2014). 態度の両価性が行動意図の形成に及ぼす影響——子宮頸がん検診の受診を対象とした検討—— 実験社会心理学研究, 54, 1-10.
- Igarashi, T., Kashima, Y., Kashima, E., Farsides, T., Kim, U., Strack, F., Werth, L., & Yuki, M. (2008). Culture, trust, and social networks. *Asian Journal of Social Psychology*, 11, 88-101.
- 石黒 格 (2011). 人間関係の選択性と態度の同類性——ダイアド・データを用いた検討—— 社会心理学研究, 27, 13-23.
- Jonas, K., Diehl, M., & Brömer, P. (1997). Effects of attitudinal ambivalence on information processing and attitude-intention consistency. *Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 190-210.
- Kadushin, C. (2012). *Understanding social networks*. New York: Oxford University Press.
- 亀田達也・村田光二 (2010). 複雑さに挑む社会心理学——適応エージェントとしての人間 (改訂版)—— 有斐閣アルマ
- Kaplan, K. J. (1972). On the ambivalence-indifference problem in attitude theory and measurement: A suggested modification of the semantic differential technique. *Psychological Bulletin*, 77, 361-372.
- Loewen, P. J., Lyle, G., & Nachshen, J. S. (2007). An eight-item form of the Empathy Quotient (EQ) and an application to charitable giving. Unpublished

- manuscript. Retrieved from http://crcee.umontreal.ca/pdf/Eight%20Question%20ES_final.pdf
- Maio, G. R., Bell, D. W., & Esses, V. M. (1996). Ambivalence and persuasion: The processing of messages about immigrant groups. *Journal of Experimental Social Psychology*, *32*, 513-536.
- Newby-Clark, I. R., McGregor, I., & Zanna, M. P. (2002). Thinking and caring about cognitive inconsistency: When and for whom does attitudinal ambivalence feel uncomfortable? *Journal of Personality and Social Psychology*, *82*, 157-166.
- Nordgren, L. F., van Harreveld, F., & van der Pligt, J. (2006). Ambivalence, discomfort, and motivated information processing. *Journal of Experimental Social Psychology*, *42*, 252-258.
- Priester, J. R., & Petty, R. E. (1996). The gradual threshold model of ambivalence: Relating the positive and negative bases of attitude to subjective ambivalence. *Journal of Personality and Social Psychology*, *71*, 431-449.
- Priester, J. R., & Petty, R. E. (2001). Extending the bases of subjective attitudinal ambivalence: interpersonal and intrapersonal antecedents of evaluative tension. *Journal of Personality and Social Psychology*, *80*, 19-34.
- Putnam, R. D. (2000). *Bowling alone: The collapse and revival of American community*. New York: Simon and Schuster.
- Refling, E. J., Calnan, C. M., Fabrigar, L. R., MacDonald, T. K., Johnson, V. C., & Smith, S. M. (2013). To partition or not to partition evaluative judgments: Comparing measures of structural ambivalence. *Social Psychological and Personality Science*, *4*, 387-394.
- Smith, S. M., Fabrigar, L. R., & Norris, M. E. (2008). Reflecting on six decades of selective exposure research: Progress, challenges, and opportunities. *Social and Personality Psychology Compass*, *10*, 464-493.
- Snijders, T. A. B., Steglich, C. E. G., & Schweinberger, M. (2007). Modeling the co-evolution of networks and behavior. In K. van Montfort, J. Oud, & A. Satorra (Eds.), *Longitudinal models in the behavioral and related sciences* (pp. 41-71). New York: Erlbaum.
- 清水裕士・村山 綾・大坊郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用. 電子情報通信学会技術研究報告, *106*, 1-6.
- Thompson, M. M., Zanna, M. P., & Griffin, D. W. (1995). Let's not be indifferent about (attitudinal) ambivalence. In R. E. Petty & J. A. Krosnick (Eds.), *Attitude strength: Antecedents and consequences* (pp. 361-386). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- van Harreveld, F., Schneider, I. K., Nohlen, H., & van der Pligt, J. (2012). The dynamics of ambivalence: Evaluative conflict in attitudes and decision making. In B. Gawronski & F. Strack (Eds.), *Cognitive consistency: A fundamental principle in social cognition* (pp. 267-284). New York: The Guilford Press.
- van Harreveld, F., van der Pligt, J., & de Liver, Y. (2009). The agony of ambivalence and ways to resolve it: Introducing the MAID model. *Personality and Social Psychological Review*, *13*, 45-61.
- Visser, P. S., & Mirabile, R. R. (2004). Attitudes in the social context: The impact of social network composition on individual-level attitude strength. *Journal of Personality and Social Psychology*, *87*, 779-795.

(2014年8月29日受稿)

Appendix

予備調査にはA県内の大学生50名(平均20.8歳, $SD = 0.74$)が参加した。調査では, Table A.1に示す15のトピックについて, トピックに対する(1)ポジティブ評価(「1:まったく肯定的でない」～「4:とても肯定的」), (2)ネガティブ評価(「1:まったく否定的でない」～「4:とても否定的」), (3)友人との会話経験(「X(各トピック)について, 友人と話したことがある」)に対し, 「1:まったくあてはまらない」～「4:とてもあてはまる」)を尋

ねた。態度の構造的両価性は, Priester & Petty (1996)の式によって算出した(詳しくは本文を参照)。態度のvalenceの度数については, ポジティブ評価得点とネガティブ評価得点の差得点を算出し, 値が正であればポジティブ, 0であればニュートラル・両価的, 負であればネガティブとし, トピックごとにその頻度を集計した。これらの指標をもとに, (1)両価的な態度をもちうるトピックであること, (2)他者との会話経験があるトピックであること, を総合的に考慮し, 本調査で用いるトピックを選定した。

Table A.1
予備調査の結果

	構造的両価性 M (SD)	態度のvalenceの度数分布			会話経験 M (SD)
		ニュートラル・			
		ポジティブ	両価的	ネガティブ	
1. 容姿で異性・パートナーを選ぶこと	4.19 (1.68)	9	13	12	3.06 (0.85)
2. 性格で異性・パートナーを選ぶこと	1.62 (0.65)	33	1	0	3.24 (0.74)
3. 簡単だが退屈な授業よりも, 難しくてもためになる授業を優先すること	3.00 (1.70)	28	5	1	1.88 (0.88)
4. 大学生活をアルバイトや部活, サークルに費やすこと	3.19 (1.71)	22	8	4	2.47 (0.93)
5. 中小企業に就職すること	2.56 (1.07)	31	3	0	2.12 (1.04)
6. 高卒で就職すること	2.69 (1.30)	19	6	9	1.62 (0.89)
7. 自分の夢よりも家庭の事情を優先すること	4.06 (1.65)	15	12	7	1.79 (0.88)
8. 挫折のない人生を送ること	3.74 (1.76)	7	11	16	1.62 (0.89)
9. 「X大学の学生」に対するイメージ ^a	4.02 (1.58)	14	14	6	1.74 (0.93)
10. 「Y大学の学生」に対するイメージ ^a	3.66 (1.76)	21	11	2	2.45 (0.90)
11. 「日本人」に対するイメージ	3.36 (1.71)	26	7	1	1.68 (1.04)
12. 「女は結婚よりも仕事」という考え方	3.48 (1.57)	15	10	9	2.62 (1.02)
13. 「男は仕事, 女は家庭」という考え方	3.16 (1.81)	4	9	21	2.62 (1.02)
14. 原子力によって発電すること	3.95 (2.03)	3	18	13	1.44 (0.70)
15. 安楽死を認めること	3.41 (1.73)	23	10	1	1.24 (0.55)

a 予備調査の参加者はY大学, 本調査のサンプルはX大学に所属していた。調査では, 各大学の名前を明示したが, 本研究では, トピック9を「外集団の学生に対するイメージ」, トピック10を「内集団の学生へのイメージ」とみなし, トピック9を本調査に用いた。

ABSTRACT

Social network composition and attitudinal ambivalence:
Focused on structural ambivalence

Taro HIRASHIMA and Tasuku IGARASHI

In this study, we examined the relationships between social network composition and individuals' attitudinal ambivalence. Attitudinal ambivalence reflects the extent to which one simultaneously has both positive and negative evaluations toward an attitude object. Although the effects of attitudinal ambivalence on individuals' behavioral decision-making process have been much examined, little is known about the "sociality" of attitudinal ambivalence. The authors take a viewpoint that individual attitudes and social network structure mutually influence each other. Although some researchers have showed that network heterogeneity increases individuals' subjective ambivalence (feelings of conflict toward an attitude object), the relationship between network composition and individuals' structural ambivalence (the extent to which one's attitude structure contain both positive and negative evaluations toward an attitude object) has not been examined directly. We predicted that structural ambivalence is positively related to social network heterogeneity, but negatively to network homogeneity. These associations would be prominent among those with a high perspective-taking ability (the Empathy Quotient; EQ). A total of 131 undergraduates participated in our survey. We assessed attitudinal ambivalence (structural and felt ambivalence) toward four types of values and social issues, network homogeneity/heterogeneity of the participants' social network (i.e., the extent to which how many other network members had a similar or a dissimilar attitude), and EQ. Correlational analysis revealed that structural/felt ambivalence was negatively correlated with network homogeneity, but none of attitudinal ambivalence indices were associated with network heterogeneity. Furthermore, EQ moderated the relationship between network heterogeneity and felt ambivalence. Contrary to our prediction, network heterogeneity was negatively associated with felt ambivalence among people with low EQ more strongly than those with high EQ. EQ is the ability not only to read others' intentions and attitudes but also to respond to them in an appropriate way. When low EQ people confront the situation in which their attitudes are incongruent with other network members, they are more likely to be affected by the difference between own and others' attitudes. Future research should distinguish processes of perceiving others' attitudes from internalizing them.

Keywords: attitudinal ambivalence, social networks, social network composition